



居沢尾根遺跡

柏木(第5次発掘調査)

平成6年度県営ほ場整備事業原村
西部地区に伴う緊急発掘調査報告書

埋蔵文化財観察庫
907.5

1995. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が居沢尾根遺跡

序

八ヶ岳山麓の原村では、農業の合理化と生産性の向上を目的とした県営ほ場整備事業が進められており、村内の柏木・菖蒲沢地区に係る「県営ほ場整備事業原村西部地区」も、本年度工事着工が予定されているところであります。

一方、八ヶ岳西麓に広がる帯状の台地は遺跡の宝庫として全国的にも著名であり、古くから注目を集めてきました。このたび報告書を刊行することになりました居沢尾根遺跡は、過去にも中央自動車道の開通に伴って長野県中央道遺跡調査会調査団が実施した発掘調査によって、縄文時代中期後葉期の大集落跡であることが明らかになっています。今回は遺跡の南斜面が工事の予定地に含まれるため、諏訪地方事務所の委託を受けて、原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものです。

今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただいた諏訪地方事務所土地改良課各位、菖蒲沢地区及び柏木地区実行委員会各位、地元の地権者の方々、また長野県教育委員会をはじめとして、発掘調査から報告書作成にいたる過程で、御指導、御協力を賜った関係者各位に心から謝意を表し、序といたします。

平成7年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

1. 本書は、「県営ほ場整備事業原村西部地区」に伴って実施した長野県諏訪郡原村宮蒲沢に所在する居沢尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、諏訪地方事務所の委託を受けた原村教育委員会が、国庫及び県費から発掘調査費補助金の交付を受けて、平成6年4月20日から8月5日まで実施した。整理作業は平成5年12月5日から平成7年3月22日まで行った。
3. 現場の発掘調査における遺構等の実測・記録は五味一郎と井上智恵子、写真撮影は五味が行った。また遺物整理・図面の整理は井上・五味・日達けさほが、原稿の執筆は五味が行った。
4. 出土品・諸記録は原村教育委員会で保管している。なお、本調査関係の資料には、42の原村遺跡番号を表記した。
5. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、長野県教育委員会文化課指導主事小平和夫・春日雅博の各氏、長野県立歴史館の三上徹也氏、武蔵雄六氏、井戸尻考古館の小林公明氏、茅野市教育委員会の小林深志氏・百瀬一郎氏、諏訪市博物館の亀割均氏をはじめ多くの方々から御指導・御教示を賜わった。記して厚く感謝申し上げる。

目 次

序 例 言 目 次

I 調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過	1
III 遺跡の位置と環境	3
IV グリッドの設定と調査の方法	5
V 遺跡の層序	8
VI 遺構と遺物	8
VII ま と め	21

参考文献・発掘調査団名簿

報告書抄録

I 調査に至る経過

居沢尾根遺跡の保護については、平成5年10月4日に行われた県営は場整備事業原村西部地区にかかる遺跡の保護協議において協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・原村教育委員会の4者であった。その席で居沢尾根遺跡については発掘調査を行うことが確認され、原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、農家負担分については国庫及び県費から発掘調査費補助金の交付をうけて、平成6年4月20日から8月5日まで居沢尾根遺跡第5次緊急発掘調査を実施した。

II 発掘調査の経過

平成6年4月20日 発掘調査の準備を始める。

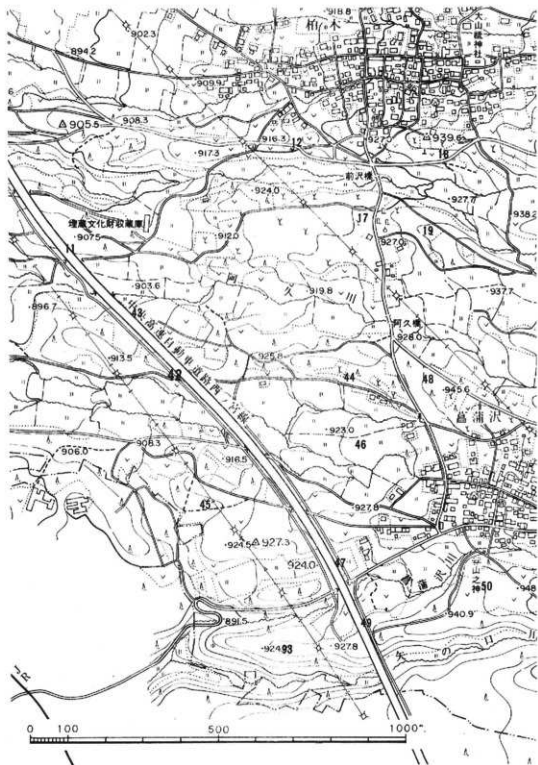
- 4月21日 午前中基準杭及びグリッド杭の設定。午後は取蔵庫にて機材の準備。
- 4月24日 明日からの作業に備えて、発掘機材の一部を搬入する。
- 4月25日 機材の搬入とテントの設置を行い、教育長挨拶の後グリッド発掘を開始する。
- 4月26日 グリッド発掘。発掘区東側のKF・G-98グリッドでは平安時代の住居址(42号住)と思われる黒色土の落ち込みが検出される。
- 4月27日 グリッド発掘。92列より南の斜面下部を中心に調査する。90列より南のグリッドからは隙が多く出土し、河川の氾濫の及んだ部分と推定される。
- 4月28日 雨天のため現場は中止、遺物の水洗を行う。
- 5月2日 グリッド発掘。KJ-98では住居址のプラン状の黒褐色の落ち込みを検出するが、東南方向への傾斜とも考えられる。
- 5月6日 グリッド発掘。発掘区東の水田は、田の床土下の黒色土が深く、大量の自然隙を包含し遺構等のある状態ではない。
- 5月9日 グリッド発掘。発掘区西側のLC-106にて炭化材と焼土を含む黒色土の落ち込みを認める。平安時代の住居址の可能性がある(43号住)。またKY・LA-103でもローム・焼土混ざりの黒褐色土層の落ち込みが検出され、遺構の可能性(44号住)が出てくる。
- 5月10日 グリッド発掘。発掘区東側(A地区)と西側(B地区)の住居址が予想される箇所はそれぞれ拡張して平面発掘を行う。
- 5月11日 発掘区拡張、遺構検出。午後は雨天のため現場は中止、遺物の水洗を行う。

- 5月12日 雨天のため遺物の水洗。
- 5月13日 発掘区拡張と遺構検出を行い、小竪穴を検出。
- 5月16日 発掘区拡張と遺構検出を行い、42号住を検出し検出写真の撮影を行う。
- 5月17日 遺構検出と42号住の調査を始める。
- 5月18日 遺構検出を行い、43号住を検出し検出写真撮影。42号住・小竪穴の調査。
- 5月19日 44号住と小竪穴を検出、43号住と42号住・小竪穴の調査。
- 5月20日 遺構検出と42・43号住・小竪穴調査。
- 5月23日 42号住調査と写真撮影。43号住調査と埋土断面写真撮影。小竪穴調査と写真撮影。44号住と小竪穴178の調査を始める。
- 5月24日 42号住精査と実測。43・44号住・小竪穴・ピットの調査。
- 5月25日 A地区の42号住・小竪穴・ピットの全体写真撮影。43号住炭化材・焼土検出。
- 5月26日 43号住・小竪穴178掘り下げ。42号住と小竪穴実測。
- 5月27日 午前中雨天のため遺物の水洗。午後は遺構実測。
- 5月30日 小竪穴178・44号住調査。42号住と小竪穴実測。
- 5月31日 43号住の炭化材・焼土出土状態写真撮影。小竪穴178・44号住調査。
- 6月1日 42号住調査。小竪穴178調査。
- 6月2日 小竪穴178調査。
- 6月3日 小竪穴178調査。A地区の42号住西は遺構の埋没が推定されたため、遺構検出を行う。テントを撤収、機材を運搬し、宿尻遺跡へ移動する。
- 6月6日 42号住・小竪穴実測。遺構検出。
- 6月8日 42号住カマド実測、精査。遺構検出。
- 6月10日 遺構検出。
- 6月14日 42号住カマド精査。遺構検出。
- 6月15日 小竪穴178・44号住土層断面実測。遺構検出。
- 6月16日 小竪穴178・44号住土層断面実測。遺構検出。
- 6月17日 小竪穴178・44号住土層観察ベルト取り除き。遺構検出。
- 6月22日 A地区遺構検出。小竪穴178・44号住精査。43号住焼土・炭化材実測。
- 6月23日 小竪穴178・44号住精査・写真撮影。A地区で縄文時代の住居址の壁面(45号住)を検出。
- 6月24日 A地区遺構検出。44号住精査、カマドの写真撮影。
- 6月27日 45号住が検出。KG列から東においても住居址の埋没が考えられたため、トレンチを格子状に設けて確認する。44号住の精査。
- 6月28日 44号住の精査。A地区トレンチ調査。
- 6月29日 43号住炭化材・焼土取り外し。A地区トレンチ調査。

- 7月4日 43号住柱穴等精査。45号住の調査。A地区トレンチ調査。
- 7月5日 43号住遺物出土状態写真撮影と遺物取り上げ。45号住遺構検出写真撮影。A地区トレンチ調査。
- 7月6日 43号住遺構写真撮影。45号住の調査。
- 7月8日 43号住実測。45号住調査。A地区トレンチ調査。
- 7月11日 43号住実測。45号住調査。A地区トレンチ調査。
- 7月12日 43・44号住、小竪穴178実測。45号住の調査と鏝等写真撮影。A地区トレンチ調査。
- 7月13日 45号住柱穴・炉の精査。A地区トレンチ調査。
- 7月14日 45号住柱穴・炉の精査。A地区トレンチ調査。
- 7月15日 43号住カマド精査。45号住精査。A地区トレンチ調査。
- 7月18日 43号住カマド・ビット精査。45号住精査。44号住、小竪穴178実測。
- 7月20日 43号住カマド断面の写真撮影。45号住精査。
- 7月21日 45号住実測。
- 7月22日 43号住カマド土層実測。
- 7月26日 45号住実測。
- 7月27日 44・45号住実測。
- 7月28日 44・45号住実測。43・45号住カマド精査。
- 7月29日 45号住実測。
- 8月1日 43号住カマド精査写真撮影。45号住実測。
- 8月2日 43・44号住床面精査。45号住実測。
- 8月3日 45号住床面精査。
- 8月5日 杭・釘等片づけ、調査終了。

III 遺跡の位置と環境

居沢尾根遺跡(原村遺跡番号42)は、長野県諏訪郡原村10,294番地1付近にあり、葛蒲沢区の約750m西方を南東から北西に走る中央自動車道道路敷と上りの原パーキングエリア敷地及びその西側にかけて所在する。遺跡は当地方に特徴的な東西に長い尾根の上とその斜面に立地する。現況は中央道敷地と山林が主体であるが、今回の調査地点は遺跡の南斜面にあたり、普通畑と水田である。尾根の北側は阿久川によって形成された沖積面を隔てて国史跡の阿久遺跡が立地する尾根に続き、南側は弘沢川の支流による沖積面を隔てて広原口向・ラシキ遺跡の立地する尾根に続く。西側は、約1kmほど先でフォッサマグナの西縁である糸魚川-静岡構造線の断層崖に沿って



第1図 尾根遺跡の位置と付近の遺跡 (1/10,000)

表1 居沢尾根遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩							
11	阿久		○	○	○	○	○					○		昭和50～53年度、平成5年度発掘調査	
12	前沢					○						○	○	昭和55・61年度発掘調査	
17	白ヶ原			○		○						○		昭和53年度発掘調査	
18	前尾根西					○								昭和51年一部破壊	
19	南平					○									
42	居沢尾根					○	○					○		昭和50～52・56・平成6年度発掘調査	
43	中阿久					○							○	昭和51年度発掘調査	
44	原山					○						○		昭和50年一部破壊	
45	広原日向	○				○	○					○		昭和58年度発掘調査	
46	宿尻			○		○	○					○		平成5・6年度発掘調査	
47	ヲシキ			○	○	○						○		昭和51年度発掘調査	
48	榎の木					○								昭和53年一部破壊	
49	大石	○		○	○	○						○	○	昭和50・平成4・5年度発掘調査	
50	山の神					○	○					○		昭和54年度発掘調査	
93	大石西				○	○						○		平成3年度発掘調査	

北へ流れる宮川によって断ち切られている。今回の調査地点の標高は913m前後を誇る。

本遺跡はこれまでに4回調査が行われている。第1次から3次までは中央道建設に伴うもので長野県教育委員会によって実施され、その結果縄文時代中期の井戸尻Ⅲ式期から曾利Ⅱ式期の住居址と小堅穴が径70～80mの半円形で並んで検出され、該期の大規模な集落遺跡であることが明らかとなり、調査されていない用地外の尾根上には半円形をなす住居址群の続きが埋没していることを予想している。また尾根の南斜面からは平安時代の住居址が同レベル上に並んで発見されている。第4次調査は原村教育委員会が実施した、尾根南斜面を中央道測道から尾根づたいに西方に走る村道改良工事に伴うもので、やはり同時期の遺構を発見している。これまでに検出された縄文時代中期の住居址は31軒、小堅穴が170基、平安時代の住居址10軒である。

Ⅳ グリッドの設定と調査の方法

まず日本道路公団用地杭を基準杭として、東西南北方向（磁北による）に十文字のラインを設



第2図 居水尾柏瀬橋亮調査区域図・地形図 (1/3,000)

定し、東西方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、西をK区、東をJ区とした。さらにその大区分の中を2mの小区分に分け、東からアルファベットのAからY(50区分)までをふった。南北方向は大区分を設けず、東西の基準線を境に2mの小区分に区切り、南に99・98・97と小さく、北に100・101・102と大きくなるよう名付けた。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①東西の大区分、②東西の小区分、③南北の小区分の順に表記することで特定した。(例：KA-100)また、東西のグリッド列については「100列」のように、東西の列については大区分の「K区」小区分の「KY列」というように称している。なお東西方向のラインは、ほぼ八ヶ岳裾野の傾斜方向である。

調査は2m×2mグリッドを東西方向に2つか1グリッドづつ手掘りによって行った。遺構等が発見された場合には付近の表土を除去して調査した。なお便宜上、発掘対象区東側の遺構検出区をA地区、西側の遺構検出区をB地区と称している。いずれも基本的には地山のソフトローム層上面(含礫ローム層の場合もある)までの調査とし、調査面積は688㎡である。

V 遺跡の層序

本遺跡の層序は、地点により異なり、耕作土層の直下がソフトローム層やハードローム層となるグリッドもある。ここでは地山のソフトローム層まで深く層序が安定していたKG-92グリッドの北壁を基本層序と考え、大まかな観察結果を記しておきたい。

- 第I層 茶褐色土層 耕作土層で厚さ13~18cm。縮まりなくローム粒と石灰の白い粒を含む。
- 第II層 暗褐色土層 第I層より色調は暗く締まるがもろい。10cmまでの小礫を含む。厚さ約30cmだが尾根側ほど土層は薄く礫を含まず、谷側ほど厚く礫を多く含む。
- 第III層 茶褐色土層 第II層より色調は明るく固い。第IV層へ漸移する。厚さ約15cm。径30cmまでの礫をかなり含むが、北(尾根側)ほど土層は薄く礫は少ない。
- 第IV層 黄褐色土層 ソフトローム層。径30cmまでの礫を含む。礫は96列より北は少ない。

VI 遺構と遺物

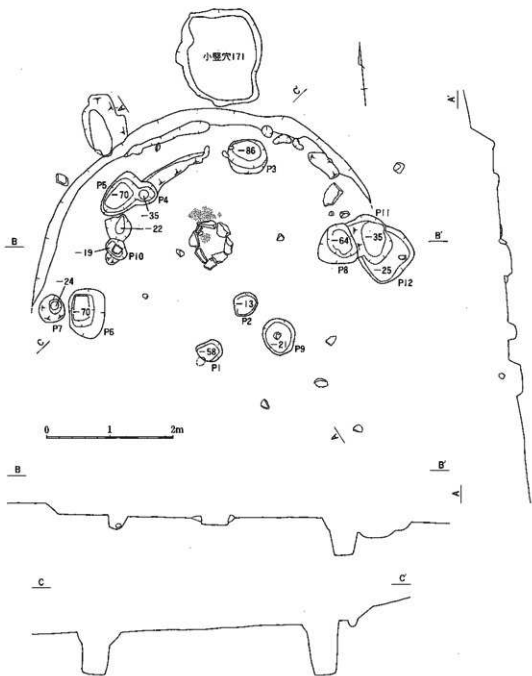
1. 縄文時代の遺構と遺物

遺構については中期後半の住居址1軒を検出調査した。

(1) 住居址

第45号住居址

調査の経過 KJ・KK-98において、曾利期の土器片が出土し、そしてKJ-98に落ち込み状の

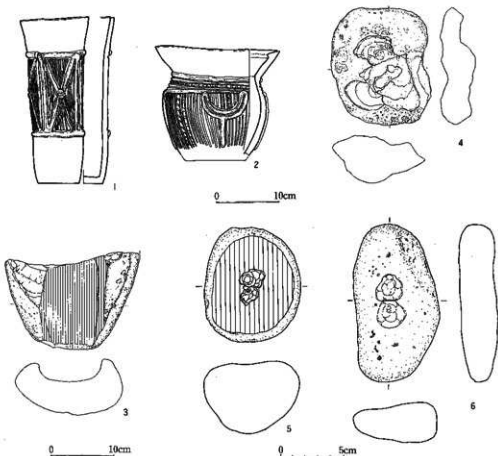


第4図 第45号住居址・小墜穴171実測図 (1/60)

ものを認めたため、付近の表土を除去し遺構検出を行ったものの、確認できなかった。そこでKI列にサブトレンチを設けたところ、住居址の壁面を検出し、ソフトローム層中で45号住居址の北壁と西壁・東壁の一部を検出し調査した。住居址の検出に手間取ってしまったため、壁をかなり掘り下げてしまっている。埋土は炭粒やローム粒を含む暗褐色土である。

遺構 遺存していた北壁と西壁・東壁の一部から住居址のプランと規模を推定すると、東西は545cmほどとなり、南北は明確ではないが、円形か楕円形を呈するものと思われる。北西壁の一部は小規模なロームマウンドと切り合っていた。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、壁高は北壁の高いところで35cmを測る。床面は全体的に柔らかく、炉址の北側に分布する焼土部分が固く締まっていたのみである。炉址から北壁にかけてはローム層を南側は茶褐色土層を床面とし、全体に南東方向に傾斜している。

住居内ではP1～P12までの穴を検出した。この中で柱穴と思われるものはP1・3・4・5・6・8の6個で深くしっかりしている。P3は楕円形、P4は円形、P5・6・8は隅丸長方形を呈し、埋土はいずれも暗褐色土で3～6cmのローム塊を含む似通った穴である。一方P1は不整



第5図 第45号住居址土器・石器実測図 (1-4=1/6, 5-6=1/3)

円形で深くしっかりしているが埋土は他と違い黒褐色土である。本址に伴うか疑問が残る。

炉址は中央奥壁寄りに、内径35×43cmの方形石囲い炉がある。8個の平板状から方柱状の安山岩礫を埋め立てて構築している。南東部の1個は焚き口と思われ、平らに据え付けられていた。内部の焼土はごく薄く、柔らかいものが一部に認められたのみである。

遺物 遺物は、縄文中期後半期の土器2個体とほぼ同時期の土器片、石皿半欠品1点(第5図3)、凹石5点(4~6)、黒曜石剥片などで量は少ない。曾利I式期の深鉢1個体(2)は床面からやや浮いて炉の西側で発見されたほか、もう1個体は埋土中から出土した(1)。1は円筒形の細長い深鉢である。口縁部と胴部下半が無文、胴部の文様は4単位である。口縁部から胴部上半部までススを附着する。焼成は良好である。2より古手の様相をもった土器といえる。2は口縁部無文のずんぐりした深鉢で、胴部の文様は2単位である。底部は欠損し、胎土は長石粒を多く含む。

(2) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物には、土器と石器がある。

土器は早期の土器片2点と中期の井戸尻式後半から曾利式前半の土器片がかなり出土しているほか、後期初頭の土器片がある。

第6図1・2は楕円押型文土器である。7は曾利I式土器である。KG・H-94から出土した。いわゆる唐草文系の深鉢で、口縁部の把手は1単位、胴部のコの字状の区画は3単位である。胴部下半の内面にはコゲが附着している。

後期初頭の土器片は約10点ある。いずれも小片で、5は底部であじろ痕が認められる。

石器としては石鏃9点(8~11)・スクレイパー2点・打製石斧13点(12~15)・横刃形石器1点(16)・凹石9点・石皿1点(17)・黒曜石剥片・堆積岩や変成岩の剥片などがある。当地方に一般的なものが多いが、17の石皿は長さ14cmとごく小型で、裏面には凹み穴が穿たれている。

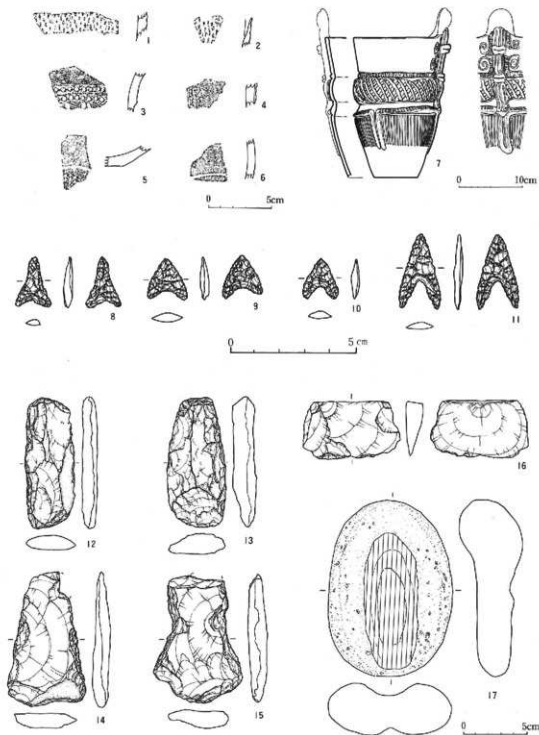
2. 平安時代の遺構と遺物

検出調査した平安時代の遺構は後期の住居址3軒と、同時期に帰属するものと思われる小竪穴7基(内1基は疑問視される)、柱穴と思われるピット2基、焼土址1基がある。遺構外の遺物としては土師器の坏・甕・灰釉陶器坏・須惠器などがあるがいずれも破片である。

(1) 住居址

第42号住居址

調査の経過 発掘区東側のKG・KH-98において落ち込みを認め、付近の表土を除去して遺構



第6图 造橋外縄文土器拓影、土器・石器実測図

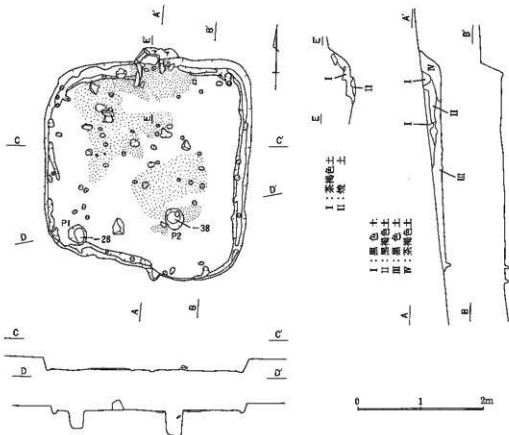
(1-6・12-17=1/3, 7=1/6, 8-11=2/3)

検出をすめたとこ、暗褐色土層中にやや歪んだ隅丸方形の落ち込みと北壁部に竈の一部と思われる礫を検出した。

土層観察のため住居址東側を先に調査し、埋土をⅠ～Ⅳに細分した。Ⅰは黒色土層でローム粒をわずかに含む。Ⅱは黒褐色土でⅠよりローム粒を多く含む、焼土粒もわずかに含有する。Ⅲは黒色土でⅠよりローム粒をやや多く含む、床面に近い部分には炭粒を含む。Ⅳはローム・焼土を大量に含む茶褐色土である。遺物は竈周辺と住居址内南西部にややまとまってみられ、埋土中には小破片が散在していた。

遺構 平面形は東西328cm、南北323cmの隅丸方形を呈するが、南東隅は外側へ張り出して歪んでいる。壁高は北壁の34cmを最高に東壁14cm、西壁21cm、南壁4cmである。床面は竈の西から中央部にかけてロームのタタキ床で固く、この部分にはローム混じりの焼土が広く認められた。それ以外の部分は茶褐色土で比較的柔らかい。壁際には周溝が回るが浅く、また所々断ち切れている。住居内で検出された穴は2つあり、形態は柱穴状である。

竈は石組み粘土竈で北壁のほぼ中央にある。遺存状態はあまり良くない。平らな石を立てて袖石としているが、東側の袖石は抜かれ、奥壁寄りの1枚しか残っていない。西側の袖石2枚



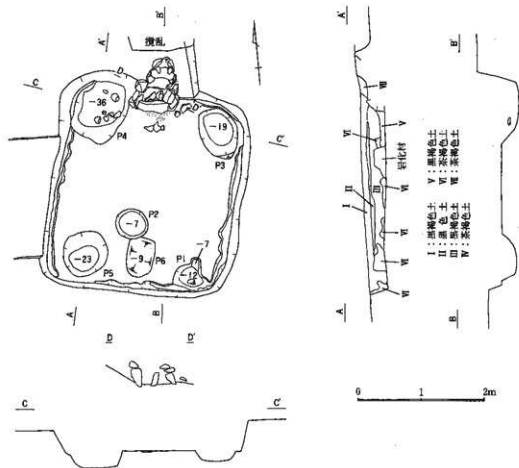
第7図 第42号住居址実測図 (1/60)

は1枚の平板石を二つに折って折り面を上にして立てている。天井石は上部の1枚が遺存していた。焚口部から煙道部までが約92cm、焚口部の幅は約50cmを測る。竈内の焼土は厚さ6cmであった。

遺物 遺物は埋土中及び床面上から出土し、埋土中ものは細片が多い。床面上から出土した大形の内面黒土器坏(第9図1)は全体的に成形、調整ともあまりいいでない。ロクロ回転成形した後、器体口縁部直下の外面を幅広く強めにナデ調整し、口縁端部は玉縁状になる。底部から体部中位にかけて粗い手持ちヨコヘラケズリを行う。甲州の影響を受けた坏と思われる。このほか、折戸53号窯期前半の灰釉陶器片数点、羽釜の鏝部片1点がある。

第43号住居址

調査の経過 発掘区西側のLC-106で炭化材と焼土を含む落ち込みを認め、付近の表土を除去して遺構検出をすすめたところ、暗褐色土層上部において隅丸方形の住居址と北壁部に竈の一部と思われる礎を検出した。土層観察のため住居址西側に先に調査し、埋土をI～VIに細分した。



第8図 第43号住居址実測図 (1/60)

Iは黒褐色土でローム粒・炭粒・焼土をわずかに含む。IIは黒色土でローム粒と炭粒をわずかに含有する。IIIはローム粒・炭化材・焼土をかなり多く含む黒褐色土。IVは茶褐色土でローム粒・ローム塊をわずかと炭化材・焼土塊を多く含む。Vは黒褐色土でローム粒と炭粒をごくわずかに含有している。VIは茶褐色土で壁のくずれと思われる。VIIは茶褐色土でローム粒を多く含み、炭粒と焼土粒をわずかに含有する。

土層説明のように、炭化材と焼土がIII・IVにまとまって認められた。炭化材は、壁から中心部に向かって放射状に落ち込むような状態で分布し、ほとんど床面から3~38cmほど浮いた状態であった。一方、焼土もローム塊と混ざりながら、炭化材の間に入り込むような形で同様の分布をし、壁近くでは住居中央部に向かって傾斜し、3~4cm位の厚さで堆積していた。炭化材・焼土と床面との間にはローム塊と焼土粒を混入する暗褐色土が分布する。こうした状態から、放射状の炭化材は、火災により住居の上屋が焼け落ちたものと思われる。

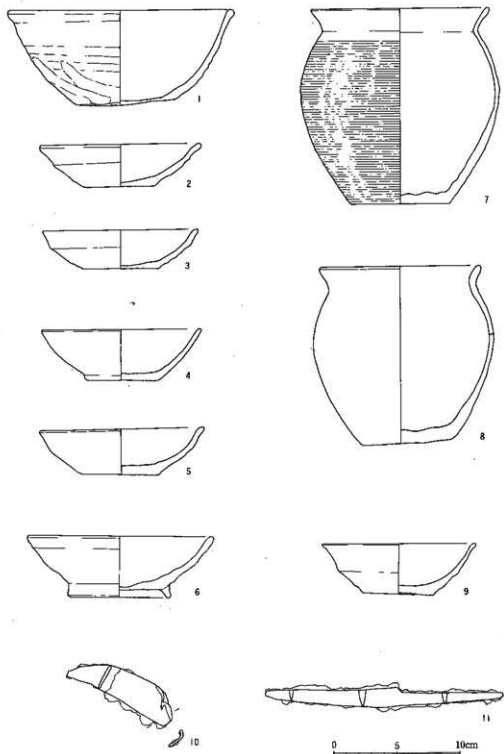
遺物は住居室内全面に散在していたが、竈周辺と竈西のP4内に多い傾向が見られた。

遺構 平面形は東西306cm、南北334cmの隅丸方形を呈し、壁高は北壁の48cmを最高に東壁37cm、西壁13cm、南壁26cmを計り、かなり良好な状態を示していたが、LC-106の発掘で住居の存在が解らないまま掘り進めてしまい、西壁は低くなってしまった。床面は茶褐色土層をタクキ締めて床面とし固くて良好であるが、西壁側はやや軟弱な部分もある。全体に西側へやや傾斜している。壁下には周溝が回るが、一部切れる箇所がある。

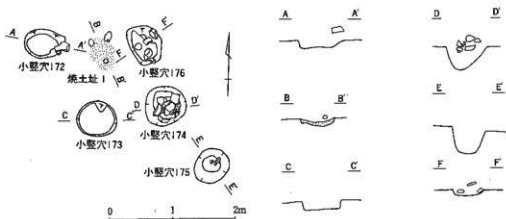
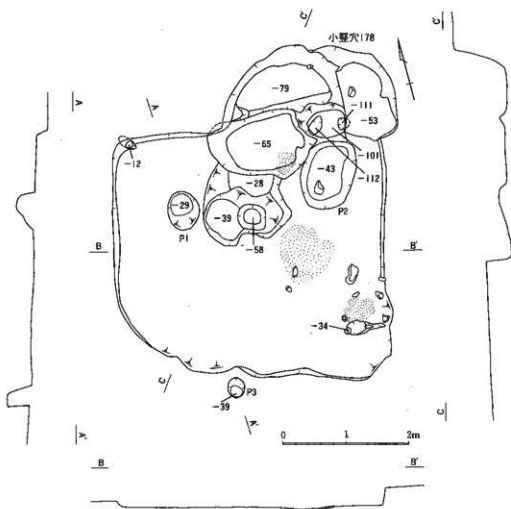
住居内で検出された穴は6つある。この中でP2は皿形で、P6と切り合うが新しい。穴の周囲と底部は固くタクキ締められていた。P4は竈西隣にあって内部からは8個の礫の他、土師器の坏と甕が穴の縁からずり落ちるような格好で発見された。

竈は北壁の中央からやや西に寄った位置にある。石組み粘土竈で黄褐色粘土で覆われていた。天井石は平板状の礫で3枚ある。焚口部から奥28cmには支脚が埋め込まれていた。焚口部から煙道部まで95cm、焚口部の幅は75cmを測る。竈内の焼土は厚さ6cmである。なお、竈の東脇には溝状の落ち込みが見られ、竈構築時の掘り方かと思われる。竈奥は攪乱によって破壊されている。

遺物 本住居に伴う遺物は埋土中に小破片が多く、床面とP4内にまとまったものが認められた。土器としては土師器坏4点(第9図2~5)と内面黒色土器塊1点(6)、小形甕2点(7・8)がある。土師器坏はいずれもロクロ成形して口縁部~体部中位までをナデ仕上げし、内面見込み部や外面下半は調整しない。口縁部のナデのため器体が上方へやや屈曲しながら立ち上がり、体部中位で軽い段をなす。底部はいずれも回転糸切りする。3は、外面に「王」の字とも見える墨書があるが解読できなかった。また2・4・5は内外にタール状の付着物がある。6の内面黒色土器塊はロクロ成形で内湾が弱く、あまり上方へのびないで浅い塊形となる。高台は付けられるが、接合と調整は雑で回転糸切痕が残る。内面は口縁部直下とロクロ目の上をヨコヘラミガキし後タテヘラミガキを加える。7はロクロ成形の小形甕である。外面の頸部以下をカキメ調整し、胴中位やや上方に最大腹径部があって、少し屈曲ぎみに張り出す。精緻な粘土で固



第9图 第42~44号住居址土師器、小笠穴171・174鉄器実測图 (1/3)



第10图 第44号住居址、小整穴172-176·178、烧土址1实测图 (1/60)

く焼き締まっている。8はほぼ同法量でロクロ成形、ナデのみで仕上げる。口縁部はやや肥厚して短く外上方に開く。外面にススが付着する。

この他に須恵器大甕破片、灰胎陶器片などがある。総じて折戸53号窯期前半の遺物と思われる。

第44号住居址

調査の経過 発掘区西側のKY・LA-103で落ち込みを認めたため、付近の表土を除去して遺構検出を行い、暗褐色土層からソフトローム層にかけて隅丸方形の住居址と、それと切り合っている落ち込みを検出して調査した。当初はこの落ち込みの方が新しいためこちらを44号住居址として捉えたが、調査の結果住居址とはならず、小竪穴178とした。埋土はローム塊と焼土粒を含む茶褐色土層であった。

遺構 平面形は、北壁側は小竪穴178によって壁の半分以上と床面を破壊されているものの、東西426cm、南北366cmの隅丸方形を呈するものと考えられる。しかし南西と東南隅及び南壁はだらだらと弧状に続き明瞭ではない。残存部の壁高は西壁の33cmを最高に北壁18cm、西壁9cm、南壁5cmを測る。

床面はローム層のタタキ床で東半分は固くて良好であるが、西壁側は比較的軟弱である。全体に南西側へやや傾斜している。

検出された穴は3つある。この中でP3は南壁中央南の住居外にあるがこの住居址に伴うものと思われ、円形で深さ39cm、北壁側へ傾斜し柱穴状の穴である。

竈は東壁の住居南東隅に近い位置にある。遺存状態は悪く、袖石に使われたと思われる礫がわずかに残されていたのみである。袖石と天井石の多くは取り除かれたものと思われる。ただ竈基底部の焼土は比較的良好な状態で残っていた。焼土厚は4cmある。焚口部から煙道部までは80cm、焚口部の幅は60cm程と推定される。

遺物 本住居址に伴う遺物は埋土中と床面から発見されているが、細かい破片が多い。第9図9はロクロ成形による土師器坏で、雑な成形で底部は回転糸切りする。口縁部はナデ調整を施している。この他ずん胴形の土師器甕片があり、内面をヨコハケ、外面をタテハケ調整し、口縁部はヨコナデ仕上げにより外反させている。また、刀子状の鉄製品が1点出土している。

(2) 小竪穴・ピット

小竪穴171

KI-99で検出調査した。平面形は隅丸方形だが壁はかなり蛇行している。埋土は、焼土やローム塊をかなり含む黒褐色土であった。底面は凹凸が著しく、深さ7cmのごく浅い皿形を呈する。埋土上面から鉄鎌(第9図10)が1点発見された。着柄部をを折り曲げた直刃の小鎌である。刃部には材状の付着物が見られる。

小竪穴172

KB-98・99で検出調査した。平面形は楕円形。検出面より浮いて2点の礫が出土している。埋土は黒色土でロームを含む。遺物は土師器の小破片5点がある。

小竪穴173

KA・KB-98で検出調査した。平面形はやや歪んだ円形。埋土は黒色土でローム塊を含む。底面は平らで壁の立ち上がりは急である。遺物は土師器坏の小破片4点が発見された。

小竪穴174

KA-98で検出調査した。検出面より高い位置から穴内の上部にかけて20点を越える礫が詰め込まれたように発見された。平面形は不整形。埋土は黒褐色土でローム粒・焼土粒を含む。底面はさかざき形で壁は比較的急斜である。遺物は鉄製の刀子1点(第9図11)と土師器の甕破片13点が発見された。刀子は長さ約18.8cmで保存状態はよい。

小竪穴175

KA-97・98で検出調査した。検出面から内部にかけて2点の礫が検出された。平面形は円形。埋土は黒褐色土でローム粒・焼土粒を含む。底面はさかざき形で壁の立ち上がりは急である。小竪穴174に類似する。遺物は土師器坏破片5点が発見された。墨書と思われるものがあるが解読できない。

小竪穴176

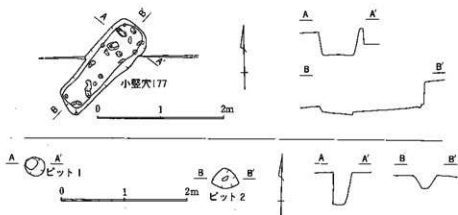
KA-98・99で検出調査した。検出面より高い位置から内部にかけて6点の礫が検出された。平面形は不整形。埋土は黒褐色土でローム粒・焼土粒と灰褐色土を含む。遺物は須恵器破片1点と土師器塊・甕などの破片30点以上が発見されたが細破片が多い。

小竪穴177

LC-104・105とLD-104・105で検出調査した。なお、LC・LD-104でのグリッド掘の際に検出できず、南側半分以上は掘り下げすぎてしまった。平面形は170cm×64cmの長方形。埋土は黒褐色土である。底面は平らで壁の立ち上がりは急斜である。形態からして墓墳とも考えられるが、遺物は土師器坏など小破片10点が発見されたのみである。

小竪穴178

KY-104・105とLA-104・105で検出調査した。当初44号住居址と考えてしまったもので、現44号住居址と切合い、本小竪穴の方が新しい。一応本項に入れたが、後世の可能性がある。調査



第11図 小壜穴177、ピット1・2実測図 (1/60)

の段階でひとつの遺構として調査してしまったが、実際には6基位の穴がごく短期間に切り合った状態で、あたかもローム層を掘りとるための穴かと思われる状態であった。埋土も黒褐色土・暗褐色土と固いローム塊を含む層が交互に自然堆積した状態であった。全体として見ると平面形は不整形で東西306cm×南北340cmを計り、一番深い部分で深さ112cmである。遺物は埋土全体から縄文中期の土器片が数点・灰釉陶器片が7点と土師器の坏・甕・埴などの破片がかなり発見されている。灰釉陶器は折戸53号窯期のものである。平安時代の遺物については、44号住居址の遺物の混入があったものと考えられる。

ピット1

KE-99で検出調査した。平面形31×28cmの円形で、深さ41cmと深い。埋土は黒色土でローム塊と焼土粒を若干含む。底面は平らで壁は急斜である。柱穴状の穴と思われる。遺物は発見されなかった。

ピット2

KC-99で検出調査した。平面形は34×32cmの菱形で、深さ20cmと浅い。埋土はピット2と同様の黒色土で、ローム塊と焼土粒を若干含む。遺物は黒曜石の剥片が2点あるが、混入と思われる。

焼土址1

KA-98付近で検出調査した。平面形は55×40cmの楕円形で、焼土の断面は凹レンズ状である。最大厚7cm。周辺の小壜穴の検出面より高い位置にあり、性格は不明である。

VII ま と め

今回の発掘区は、尾根頂部より下がった南斜面にあたるが、KN列あたりを境に東と西にそれぞれ日溜まり状のえぐれ部となり、この部分に生活の痕跡が集中していた。

縄文時代としては早期・中期・後期があり、これらの時期の遺物は、以前にも発見されている。早期は押型文土器の小片が発見されたのみである。中期は東のえぐれ部の西端で住居址を1軒発見したが、今まで発見された住居址の中では最南端に位置する。時期も曾利Ⅰ式期で、今まで調査された大規模な集落跡を構成するものであり、該期の集落立地を考える上で貴重な資料となるものと思われる。後期は初頭の堀ノ内期位の土器片を発見しているが、出土点数はわずかである。

平安時代は2箇所の日溜まり状のえぐれ部からそれぞれ住居址と小竪穴を検出できた。これは、以前の調査による集落立地と同様のもので、尾根上の平坦部を避けて居住区が設けられていたことを示しているものであろう。時期的にも平安時代後期という同一の時期と考えられ、今後この時期の集落立地を考える上で貴重な資料を追加したものといえよう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

- 1985.07 原村役場「原村誌上巻」
1981.10 長野県教育委員会「昭和51・52年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その4」
1988.03 長野県史刊行会「長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物」

発掘調査団名簿

団 長	平林 太尾 (原村教育委員会教育長)					
調査担当者	五味 一郎 (原村教育委員会)					
調 査 員	井上智恵子					
調査参加者	宮坂とし子	鎌倉きふみ	清水つるゑ	清水 豊一	清水 太助	
	清水 健郎	清水千代子	西沢 寛人	小林 正一	中村きみゑ	
	小林 ミサ	長林ときわ	清水 正進	平林 途雄	清水 けさ	
	小林 静子	清水 容子	瀬間とき子	小林サカエ	小林 喜重	
	浦井 肇子 (発掘調査)		日達けさほ (整理)		(順不同)	
事 務 局	平林今朝二 (教育次長)		大口美代子 (庶務係長)			

宮坂 道彦（主任） 伊藤 佳江 平出 一治 平林とし美
五味 一郎（文化財係長）

写 真 图 版

写真1 遺跡遠景 (西から)

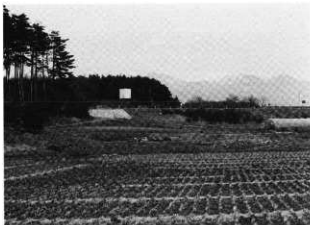


写真2 発掘調査風景 (南から)



写真3 第42号住居址
遺物・礎出土状態 (南から)

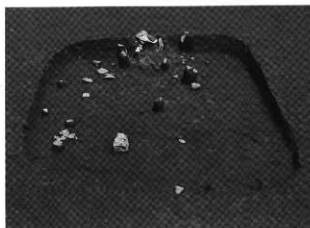




写真4 第42号住居址 (南・6)

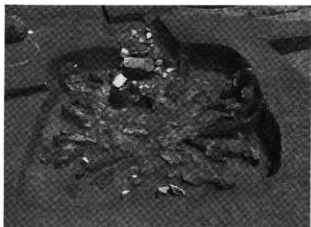


写真5 第43号住居址 焼土・炭化材検出状態 (南・6)



写真6 第43号住居址 焼土・炭化材検出状態 (部分)

写真7 第43号住居址 (西・6)

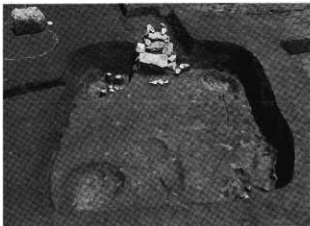


写真8 第43号住居址竈周辺



写真9 第43号住居址小形甕出土状態



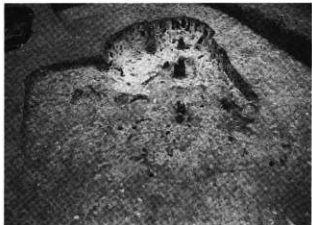


写真10 第44号住居址 (手前)
小竪穴178 (奥)(南西から)



写真11 第45号住居址 (東から)



写真12 第45号住居址
炉址と遺物出土状態

写真13 第45号住居址土器出土状態



写真14 小竪穴177 (南東から)

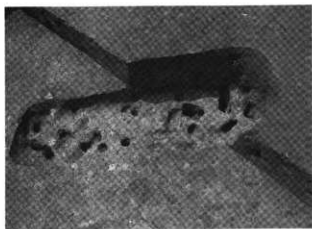


写真15 小竪穴174 (南西から)



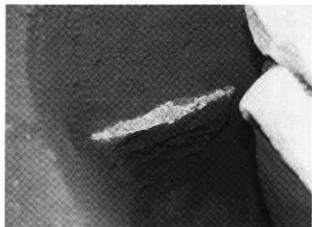


写真16 小竪穴174
鉄製刀子出土状態

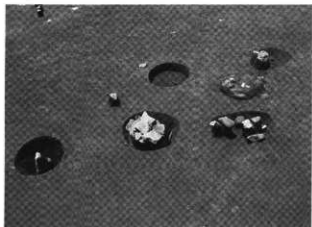


写真17 小竪穴172～176
焼土址1 (東カ6)

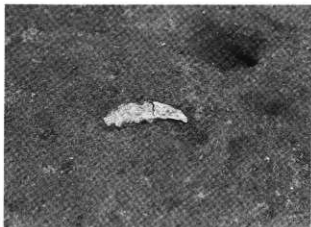


写真18 小竪穴171
鉄鎌出土状態

報告書抄録

ふりがな	いざわおね							
書名	居沢尾根遺跡（第5次発掘調査）							
副書名	平成6年度県営ほ場整備事業原村西部地区に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	33							
編著者名	五味 一郎							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-2111							
発行年月日	西暦 1995年3月22日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
居沢尾根	長野県諏訪郡 原村	3637	42	35度 57分 28秒	138度 11分 41秒	19940420 } 19940805	688	平成6年度県営ほ 場整備事業原村西 部地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
居沢尾根	集落跡	縄文時代 早期 中期 後期 平安時代 後期	縄文時代中期 住居址1軒 平安時代後期 住居址3軒 小竪穴7基		縄文 早期土器片 中期土器(深鉢など) 後期土器片 石器(石鏃・打製石 斧・凹石・石皿など) 平安 土師器・灰輪陶器 (坏・甕など) 鉄器(刀子・鎌・など)			

原村の埋蔵文化財33

居沢尾根遺跡

平成6年度県営ほ場整備事業原村
西部地区に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成6年3月22日

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野 4724
TEL 0263-56-2111

